創刊号

aaca

社団法人 日本建築美術工芸協会

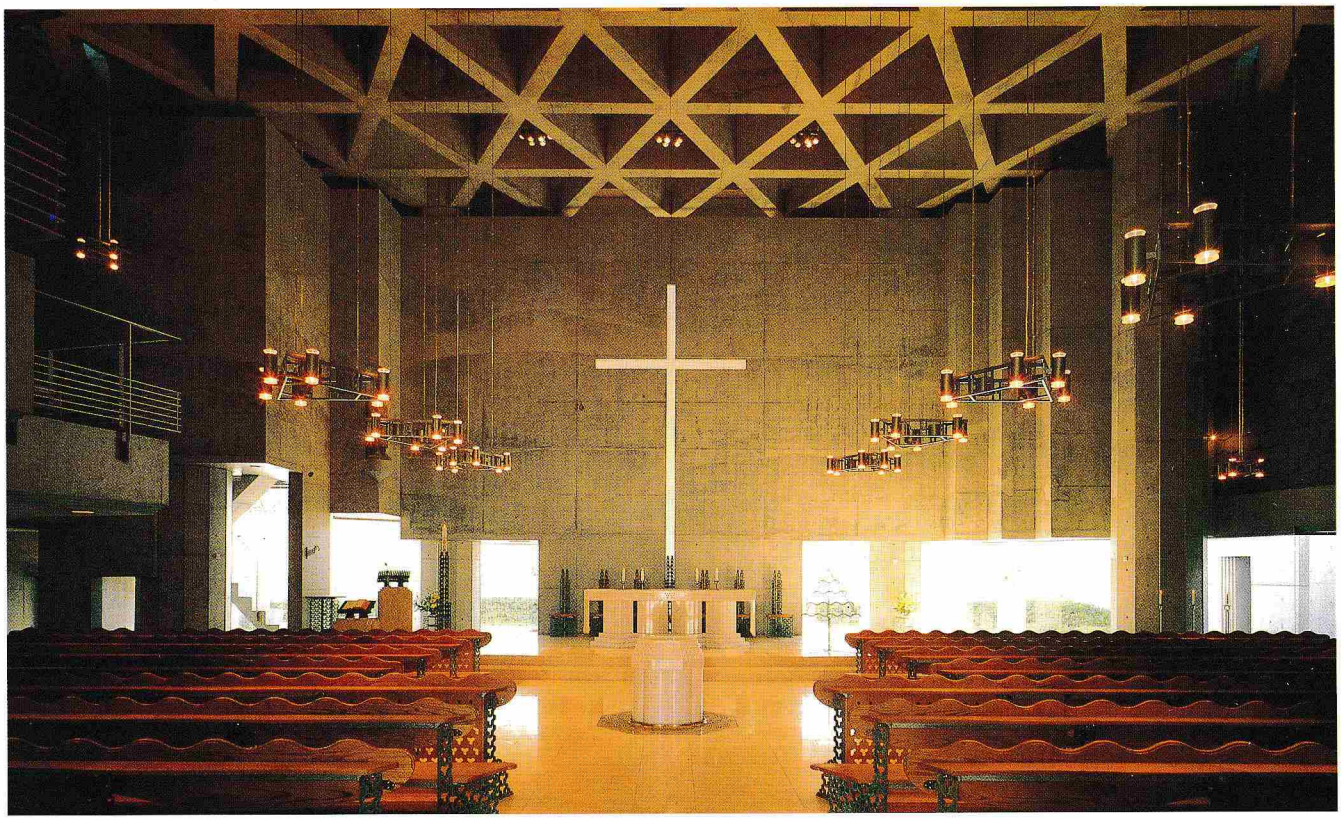
大塚オーミ陶業株式会社

創刊にあたって

芦　原　義　信
（社団法人 日本建築美術工芸協会々長）

この度、日本建築美術工芸協会の会報が発刊されます。この協会は、建築家や、美術家、工芸家が協力して、わが国が世界の文化大国となるため頑張ろうということではじまったものなのです。先日、東京サレジオ学園が、村野藤吾先生と吉田五十八先生を記念する村野賞、吉田賞を夫々受賞されました。これはほんとに機宜に適した受賞であったと私自身も大変うれしく思っています。

というのは、この建築が建築主のみならず多くの関連芸術家の努力でできあがっているということです。先般アメリカから来た友人の建築家が、アメリカではポスト・モダンはもう終ったというのでした。私自身も最近の建築雑誌を見る度になんとなくそんな予感がしないのでもなかったのですが、それでは次の方向はどうなのかと思いあぐんでいる時、このサレジオ学園の建築を見て、はっと思い当ったような気がしました。これは、ポスト・モダンの建築のようにわざわざ正面を飾ったり、不思議な飾りをつけたり、斜交面をとったりするものではなく、あくまで近代建築の正統派として建築家、彫刻家、家具設計家、ガラス工芸家、テキスタイルデザイナー等が協力して構成した素晴しい空間なのです。これこそ、わが建築美術工芸協会のほこりとすべき建築であると信ずる次第なのです。これからも、このような本格的な建築が誕生することを心より望むものであります。



吉田五十八賞とは

村　松　貞次郎

建築と建築関連美術の近来類い希な成果として東京サレジオ学園の総合作品が、第14回の吉田五十八賞を受賞された。「会報」創刊に花を添えることになったのは、同賞の選考委員の一人として嬉しい限りである。

吉田五十八賞は、昭和49年に亡くなられた建築家・吉田五十八先生の遺志に基いて設立された「吉田五十八記念芸術振興財団」（理事長　渡辺忠雄）が、昭和51年から授賞してきた建築および建築関連美術の表彰制度である。賞金は、建築、関連美術それぞれ１点300万円で、銀製文鎮の副賞を付けるのを原則としている。また別に特別賞があり、第1回の大工用鋸と鉋の道具鍛冶３名のように、建築や美術を底辺で支えてきた人びとの表彰も続けてきた。きびしい審査で、時に該当作なしの年が続くこともあったので、第12回から佳作賞の制度を新設した。

現在の選考委員は、芦原義信、海老原一郎・圓鍔勝三・加倉井和夫・高山辰雄・脇田和、それに村松の７名であるが、第14回の選考中に大江　宏先生が亡くなられたのはまことに残念である。東山魁夷先生もつい最近まで熱心に選考に当られた。また最初から熱心に関与された故村野藤吾先生の、吉田先生に対する友情の篤さには胸をうたれるものがあった。

評価の原則は別に明文化されていない。ただ私は生前の吉田五十八先生が生粋の江戸っ子気質で、小さなものにこめられた精緻さを特に愛されていたことを直接うかがっている。それで、まさに〝珠玉の作品〟こそがふさわしい、と勝手に思い込んでいるのである。

一本の糸で結ばれた〈出会い〉

阪　田　誠　造

人との〈出会い〉、敷地との〈出会い〉が、作者につくる意欲を激しく燃えさせる原動力となることを、私は東京サレジオ学園の仕事を通じて痛感させられました。

会ったあと、自己の心身に爽やかな印象を残す関係、惚れぼれする心酔を覚え、さらに、時間が経てば経つほど、深さや広さを感じ、内面に刺激を受ける関係での、対人、対場所との出会いは、つくるエネルギーの源泉となり得ます。対人では、強い信頼感が芽生え、意識を共有しあえる関係となり、対場所では、価値の認識が定まり、場所の魅力の源泉と建築をどう結ぶかのイメージが、楽に湧いてくるように思えます。東京サレジオ学園では、村上園長の言葉ですが、一本の糸で結ばれた人々との〈出会い〉があり、多くの共同作業は頻繁な打ち合わせを持ちながらも、心の通じ合う気持ちのよい結果に到達でき、夢のような敷地に併せて、この仕事は実に幸運に支えられていたと思います。

施主に当る人々は、建築家にとり理想のクライアントでした。建築をつくる高い理想と強い情熱に燃え、つくる過程の総てにわたり丁寧に辛抱強く、設計者に付き合っていただき、しかも私たちの提案は、常に何ら修正なく受容れて下さいました。

東京サレジオ学園は、戦災孤児養護のため設立され、恵まれぬ少年たちの親代わりの養育活動を、40年以上も続けている社会福祉法人です。母体は、孤児養育に一生を捧げたイタリア19世紀の聖人、ドンボスコを創始者に仰ぐ、国際的宗教団体です。

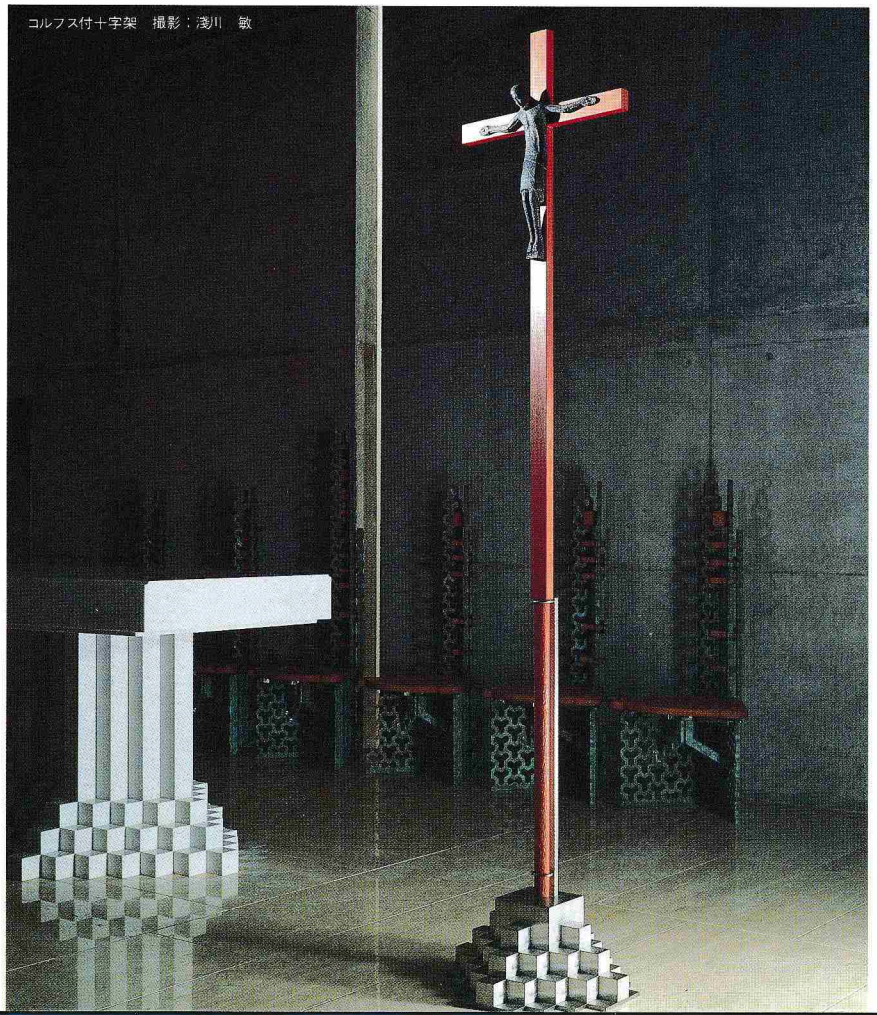
住む家、生活環境、集団生活の諸問題、少年の成長と保護養育のあり方、ドンボスコの教え、カトリックの世界、聖書、神、人間、自然……と、設計者として検討すべき課題は次々に拡がり、到底この建築をつくる時間の中では、表層をなめるのもやっとという状態でしたが、多くは今後の課題として、私たちの内に生き続けていくものと考えています。こうした問題の存在を知り得たのも、尊い活動に生きる、神父たちとの〈出会い〉によるものでした。

学園の関口さんとは旧知の関係ながら、建築をつくる仕事を通じて〈出会い〉を確認させられました。つくる作業に憑かれたように、現場が始まって以来、私たちのスタッフと、行動と時間をいつも共にして、帰宅は連日深夜に及ぶこの数年間でした。横尾龍彦さん、林良子さん、イワタルリさん、オルガンの辻宏さん、鐘のペタメル社、大理石制作の中田さんをこの仕事に結びつけたのは、関口さんと藤木君の執念とカンの連携プレイの成果です。一部に関口さん手作りのステンドグラスも設置しました。

方圓館の坂本和正さんとは、20年以上も昔に坂倉準三先生のもとで仕事をした仲間で、奥さんとも親しく交際をした関係ですが、交流の中断期間があり、数年間、象設計集団を事務所に招いてスライド会を行った機、彼の最近作を詳しく知ることとなりました。全身体的関与の手づくりを感じさせる印象が強く残っていて、小聖堂の家具を彼のものでと考え、協同者に引き入れました。第2期工事の設計からの参画ですが、神父宿舎と園舎一部の家具もつくってもらい、第3期の記念聖堂、交流ホームでは、家具のみならず範囲を拡大し、私たちの設計スタッフと一体化しての協同作業をする仲間でした。彼とも、方圓館のスタッフとも、新しい〈出会い〉を感じるところとなりました。

横尾龍彦、林良子、イワタルリの各氏とは全く初対面の関係にも拘らず、その作品が、建築との完璧な調和を示したことには驚きを感じます。横尾先生には、横浜高島屋の個展会場で村上園長たちとご一緒に初めてお目にかかり、その作品に魅せられました。先生の絵は非常に静謐であり、一方、宇宙、或いは胎内の深い生命の動きを見るような、心霊を想わせる絵でした。控え室には、禅画がいくつもあり、ファンのために筆の遊びに描かれたとのことでした。ご自身はキリスト者であり、しかし禅の心身の修養にも通じておられるようです。優しいお顔を見ているうち、当方の考えをくどく説明するまでもないと感じました。林さん、イワタさんとの作品との〈出会い〉には不思議の糸の存在を痛感させられます。

吉田五十八賞によって、これらの方々が等しく顕彰され、選考委員の先生方の正に紙背に達した審決を感じました。



コルフス付十字架　撮影：浅川　敏

関口幹子

戦後の貧しい時代を戦災孤児達と共に耐え忍んで過ごして来た旧園舎とその裏側に広がる草芒々の空地にたたずみ子供達の為に暖たかなぬくもりの感じられる家を造りたいと念じてから6年、たおやかな緑と神の光のように子等の舎に降りそそぐ光と、木々の緑を通って来る風の満ちあふれた夢のような少年の村が今、目の前に息づいている。

昭和59年8月、中央線武蔵小金井駅での出会いから今日まで、坂倉建築研究所の阪田先生、藤木先生をジョブキャプテンとするスタッフの方々と学園建設委員会のメンバーとの長い道のりが思いおこされます。

親の愛に恵まれない、心に飢餓感を持って傷ついた子供達を暖たかく包める家はどうあるべきか試行錯誤の日々の中、暖かくそして熱い心で我々をリードしていって下さった藤木先生やスタッフ達のひたむきさに心を打たれながら、子供達に何より美しいもの、真なるもの、善なるものを与えたい、又親の愛に叶わないまでも、出来る限り深い心を注いで育てて行きたいと願い、その想いを全ての家づくりの礎として考えた。どんな小さな部分もなおざりにせず心を尽くしてひとつひとつ積みあげていきながら、色彩計画、家具、備品を始め、マリア像、聖櫃、祭服、聖具等々何10年にわたって、数知れぬたくさんの子供達が、生活し、憩い、目にし、さわるものであるからこそ、素朴で、しかもまがいものでない本物を与えたいと祈りに近い想いでやってきました。

長い年月に耐えられる生命が息づいているような家具を入れたいと願った時に出会った坂本和正さんと方圓館のメンバー。

素朴でしかも子供達を暖たかく慈愛あふれるまなざしで包みこんでくれるような御像をとさがしまわり西宮のトラピスト修道院のマリア像に出会いやっとのことでドイツ在住の先がわかった横尾龍彦さん。

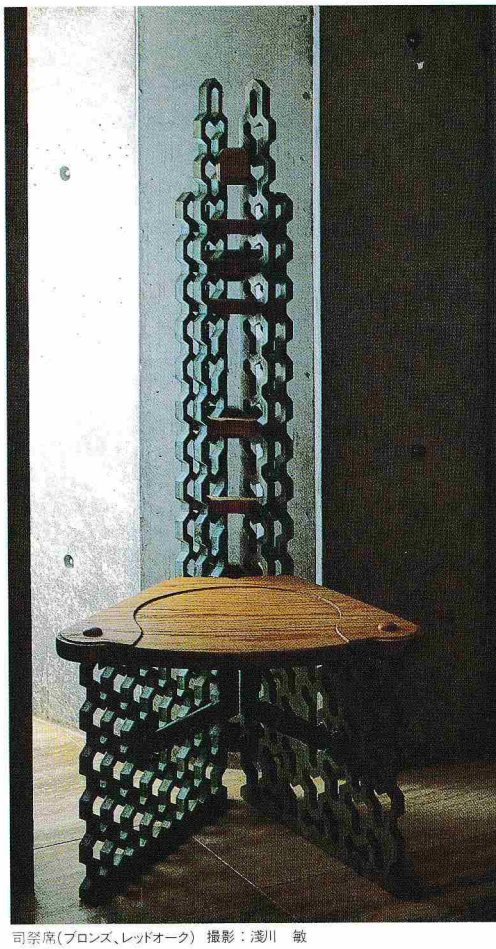
緑と光の内陣に置く聖櫃は、常ならぬ清らかな光輝くガラスが良いとなり、たくさんのガラス工芸を見て歩き、純粋無垢な人柄そのままの従来のガラスにない暖たかな光を放つガラス造形をなさっている岩田ルリさん。

自然の色にこだわり草木で糸から染め、つむがれ織りあげて素朴な風あいで高貴な色の祭服を制作しつづけている林良子さん。

その他、金造、石彫、木工等などこの人以外考えられないと思うアーチストと出会うことができました。カトリックの教えに

カトリックの教えに“召し出し”という言葉があります。神の業をたすける為さがし出され使われるというような意味ですがこの仕事の中で強く感じたことは、私達1人1人が見えない力で集められ活かされているという不思議な想いでした。

こうして出会った建築家とアーチストが何回にも及ぶヒアリングを通して心を1つにしてひとつの高みに向かって進んで行ったさまはそれだけでも美しくまた深い愛と限りない情念をこめて造りあげた作品がそれぞれの場所で、生命をふきこまれ、子供達を包みこんでいるさまは、ここに住む子供達の心の中に少しづつしみとおり、いつの日か暖かな愛が根づくものと思います。



司祭席(ブロンズ、レッドオーク)　撮影：淺川　敏

親の愛に恵まれなかった学園の子供達がこうしたたくさんの建築家、アーチスト、施工者、学園の職員達の深い愛を注がれ社会への自立を目指して行けることを深く感謝すると共に、子供達が大人になってその心を感じ、ほこりとし次の世代へ伝えて行ってくれたらと願わずにいられません。

「電鋳による壁面パネルの提案」

⊙ご希望のデザインで原型をつくり、銅電鋳で精密に制作します。
着色は青銅・ブロンズ・銀いぶしなどで、900㎜×1800㎜まで制作できます。

⊙金・銀電鋳もOKです。

資料のご請求は、担当内藤・石渡まで

株式会社 イシワタ

本社 〒110 東京都台東区北上野1－14－7
TEL.03-843-9311 FAX.03-843-1307

東京サレジオ学園　建設工事担当（関係分のみ抜粋）

建築主：社会福祉法人　東京サレジオ学園（東京都小平市上水南町4-7-1 ☎0425-21-0412）

設計監理：坂倉建築研究所・東京事務所（代表　阪田誠造）

総合建設業：戸田建設株式会社・東京支店－2期、3期－日本国土開発株式会社・横浜支店－1期、4期－

ステンドグラス：興和商事株式会社（石崎　隆）

瓦：丸栄陶業株式会社（樅山善久）

陶板：大塚オーミ陶業株式会社

石彫：株式会社多摩石彫　祭壇・洗礼盤他製作（中田浩嗣）

造園：株式会社日比谷花壇

照明：松下電工株式会社

祭具・十字架：株式会社ダイチ

家具：方圓館　坂本和正

和室家具・照明製作：創工林　服部敬三

鍛造家具・燭台製作：アトリエアーム　押山郁夫

木工家具製作：日輝工業、星亀木工所

彫刻：横尾龍彦（イエズス像　マリア像　ドンボスコ像　小羊像）

祭服：羊鈴舎　林　良子（主祭服とステラ　脇祭服とステラ　アルバ型祭服とステラ　子供用侍者服　祭壇布）

ステンドグラス：横尾嘉子、方圓館　坂本不二

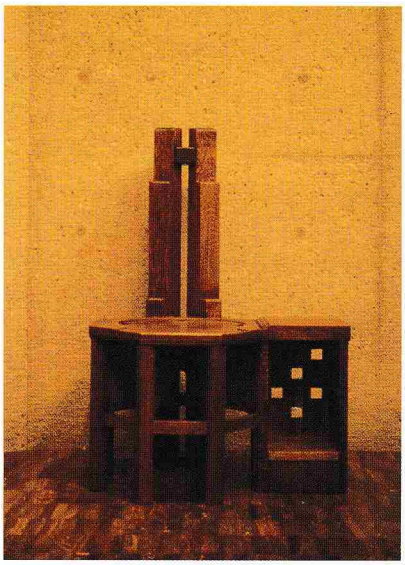
ガラス造形：イワタ　ルリ（聖櫃　マリア聖堂トップライト　聖水盤　皿）

「小・聖堂物語」 藤 木 隆 男

40㎡余りの8角形の土間コンクリートスラブの上に人々が集まった。小聖堂の広さ、家具（祭壇、会衆席等）のレイアウト、ミサ典礼の人の動きの検討の為である。鉄筋をまたいでスラブ上に出ると、そこは、足場や型枠材に囲まれた見馴れた現場風景ではあったが、冬の陽だまりの中に既に穏やかな聖堂空間を感じさせていた。人々は、口数少なく、現場の折りたたみパイプ椅子を、平行に或いは、斜めに並べては座り、また並べ変えては、祈る姿勢をとったりした。これが、施主・東京サレジオ学園、家具デザイナー・方圓館、建築家・坂倉事務所の最初の出会いであり、協同作業であった。昭和62年1月のある朝のことである。

既に建築の設計段階で、スケッチと1/50の模型（黒紙を貼って光の効果を確認した）とで内部空間のスケールや質が検討されていたのだが、小聖堂内部家具デザインが方圓館に委ねられると、彼らは、スケッチと共に1/20の椅子の模型、それに1/20の小聖堂の内部空間の模型を造り上げた。1/20の模型世界は、建築家には新鮮な印象を与えた。原寸まであと1歩という所まで来ていた。後にエスカレートして、タタミ2帖大のドンボスコ記念聖堂の1/20模型となった。これはスタデイ模型とは言え方圓館総動員で何日もかかり、徹夜明けの日曜の朝のミサで、学園の子供達に披露した後、そのままJIAの模型展会場へ運ばれ、更に岐阜の辻オルガン工房へも旅した勇者である。家具検討用にお願いした1/20の模型は、はからずも建築内部空間の確認と新発見、更には現場での決定に計り知れない効果をもたらしたと思う。その点、方圓館の方々に感謝するところ大なるものがある。

ところで、方圓館と坂倉事務所はそれまで教会建築の経験がなかった。後に正式なキリスト教典礼学の講義を受ける機会が来るが、小聖堂の段階では、まだ手さぐり、模索の域を出ていなかった様に思う。まだまだ学習と体験と思い入れ、或いは祈りが足りなかった。観想空間としての小聖堂の会衆席は、聖堂の広さにもよるが、跪き台付の長椅子＝バンコでなく、1人1人の祈り、新しい祈りのスタイルを想定して個別の椅子としたのだが、そこでの会衆の祈りの立ち居振る舞、聖歌集や聖務日課の扱い等、ごくあたりまえの事が実感として解らなかったのである。学園の関口さんに案内され、その冬のある早朝5時半、つつじヶ丘の汚れなきマリア修道院本部小聖堂のシスター方のミサにおそるおそる与かることになった。関口さんは、この学園建設のあらゆる場面で、熱心で適切な私達の導き手であり、私達の創作の良き共同者であった。いくつもの教会で共に祈り、現場を歩き回り、食事やお酒をいしっょにし、建築について飽くことなく語り合ったものである。敬虔なキリスト者である関口さんに心配し



なくてよいといわれてはいたが、祈りの言葉も知らない私達は、小聖堂に流れるロザリオの声の輪に入った瞬間、異次元の空間に急速に下降していった。そして聖歌や祈りの言葉に晒される新しい体験の喜びに浸っていった。バラバラに離れて空いた席に着いた方圓館の1人1人がそこで何を見、何を体験したかはわからないが、その後の郊外レストランでの朝食は睡眠不足のせいか、カルチャーショックのせいか、皆必ずしも元気で食欲旺盛とは言えなかった。もしかすると、方圓館のスタッフの頭の中では、既に椅子のイメージとの格闘が始まっていたのかも知れない。

しばらく後に方圓館から出て来た椅子のデザインは、脇に本箱を付けた8角形の構築的なもので、触覚的で親しみ易く、厳粛さと風格とを感じさせる見事なものであった。竣工後のミサでその椅子に座って祈りながら、1/50や1/20の小聖堂、小春日和のパイプ椅子の小聖堂、早朝のシスター方の小聖堂が去来した。ミサ後、学園の鈴木正夫神父が、「椅子にはカテドラルという意味があります。この椅子を見てそれを思い起こしました。」と言われたとき、私は、その予期せぬイメージの逆パースペクティブな構図に強く打たれた。方圓館に対する施主と建築家の信頼はここに定まり、ドンボスコ記念聖堂の大仕事の出発点となったのである。

坂本和正

東京サレジオ学園の家具デザインをしないかと、坂倉建築研究所の阪田氏の意向を受けた担当の藤木さんから電話連絡を貰ったのは、小聖堂工事直前の頃だった。

村上園長にお目にかかり、学園が何をしようとしているかを伺った。

「やりましょうか」といとも簡単に引き受けてしまったものの「さてどうしたら良いだろうか」というのが当初の率直な気持だった。

八角形を基本にした小聖堂の図面から建築家がやろうとしていることはかなり明解に読み取れるが、私には教会についての知識がほとんど無い。典型として瞼に浮かぶゴシックの造形はたしかにすばらしいのだが、それにとらわれてデザイン制作にかかると、つまるところ堂々めぐりになりそうでうまくない。新しくデザインされる教会のモダンな造形と宗教的内容との結びつきも私にはいまひとつはっきりしない。

あれこれ思いをめぐらしているうちに、結局実際に教会堂の中で何が行われるかを識ることから始めなければということになった。人びとがそこに集まる理由、その使われ方についてなどである。

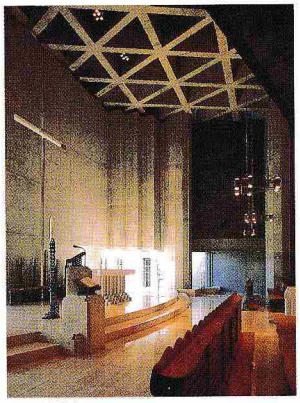
学園建設委員会のマネージャーである関口さんは女子美大出身で、学園の実務、教会の内容のこと以外の建築、デザインについても大変詳しい。坂倉の建築スタッフとの合同見学会や調査、典礼学の勉強会にことごとく行動を共にし、デザインの進行中もおかしな注文をつけない代わりに決して後退をゆるさなかった。私と方圓館のスタッフたちも彼女の積極的な展開の仕方に引っぱられて行くうちにやがてとっかかりが摑めたようだ。

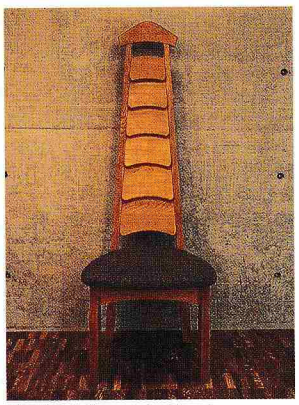
私のカトリック教会への空間認識は観念的な、そして表象的な形式のイメージから次第に、この世に生きている人びとが心のあり方を大切にして一同に集う場なのではないだろうか、というように変わっていった。わずかおぼろげだが見えたような気がした。

人の心が問題の主要をなす空間はそれなりの豊かなものでなければならないと思った。

その豊かさには人のなせる業、人が作ることの意思が表現されていなければならないとも考えた。

祭壇や家具の形を模索している頃は沢山のエスキース模型を作ったり、それを使って建築グループとディスカッションを重ねた。関連のアーチストにも機会あれば見せて対話の材料とした。一方、ヴィクトール・リュシアン・タピエの〝バロック芸術〟という本の中でバロックという言葉の定義を風変りな形姿、自由闊達な精神、と言い表わしているのを見つけた。これはバーナード・ルドルフスキーの形に対する見方と、切り口こそちがえ、共通の響きがある。かねがね私が思っていた事、プリミティブな造形の力、常識から転げたおかしさの天真爛漫さ、繰り返す連続的形と人の永遠への願望との合致といったエレメントをこの教会の家具やインテリアに投入することに制作の舵を向けた。


聖堂内陣部


職員宿舎食堂　ハイバックチェアー

ドンボスコ聖堂の石の祭壇、洗礼盤、ブロンズによる家具群・ローソク台の脚、瓦の内壁等は、ごく単純な幾何学的形を繰り返すことによって複雑な形と光りが織りなす合奏を演ずるように構成している。バンコ（会衆席）の木の背板は波のざわめきが聞こえるかのようにデザインした。このような組み合わせはただきれいに配列されているのではなく、何とかしてそれらが横尾さんの彫像の次元にも負けない造形的な言葉を発信したいと苦慮した。

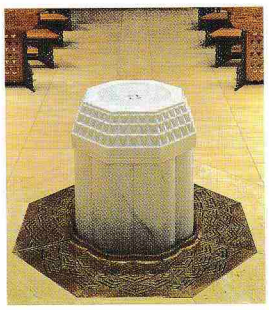
イワタさんのガラスブロックの聖櫃、林さんの祭服のデザインともども建築空間に共鳴する言葉を贈りたかった。

複雑な形（それほどでもないのだが）を実現するためには、それなりのことを製作側にたのまなければならない。しかし、今の日本の生産のやり方は、手間のかからない能率的な方法が歓迎される。だからといって昔ながらの手仕事で全てやるのが本質だなどとも言っていられない。実現に向けて、ある場合にはめんどうだと突き返されそうになってもそれを押し切るだけの強引さも必要であり、またある場合は機械で何が可能かを見きわめつつ、それを逆手に取ったディテールで解決して行かなければならない時もある。

今回の家具、インテリアの仕事では、木、石、金属、ガラス等様々なマテリアルに関る職人や技術者の人たちがそれぞれの力を発揮してくれた。

彼等は内心時流に合わないと思っていたかもしれない。しかし、先にも述べた通り人が造ったという意思が形の奥に反映されるには、ここ一番のねばりも必要なのである。

結果として東京サレジオ学園の仕事に努力をかたむけた人びとの総体が良い成果を生んだのだということを誇りにし、心にとどめてゆきたい。


洗礼盤（大理石）　撮影：淺川　敏

何度も深夜までに及んだディスカッション。やさしさとしつこさが同居している方圓館のスタッフ。あきらめず制限時間ぎりぎりまでねばりぬきはらはらすることたびたびでした。又朝学園に来ると子供達が口々に、〝昨日おじちゃん達ねないで仕事してた〟と伝えてくれることもたびたびでした。時間と心を多くかけたからこその家具の存在感とぬくもりであると強く思います。

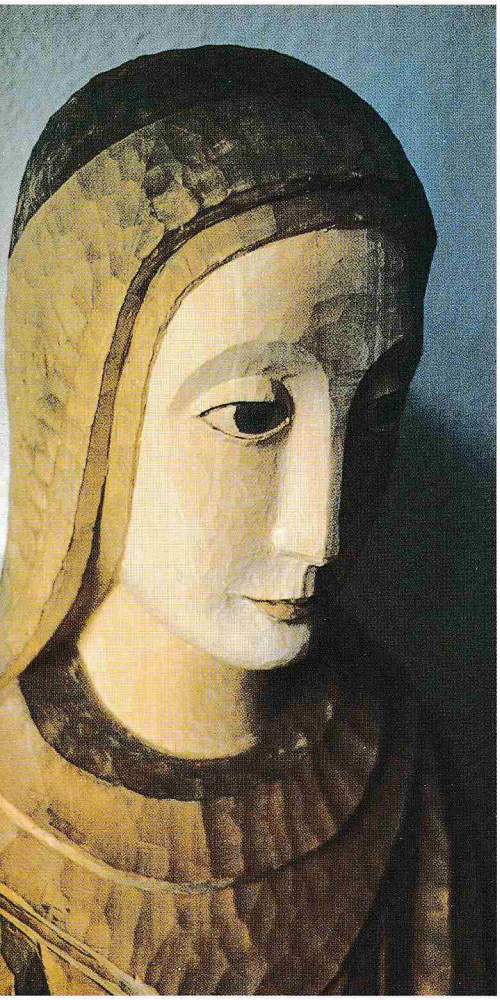
（関口幹子）

横尾龍彦

1986年の春、突然未知の関口幹子さんという東京サレジオ学園の方から一通の手紙をいただいた。"今回当学園では新しい聖堂を造るために設計担当者と共に方ぼうの教会を見て廻ったが、貴方の作品、特に西宮のトラピスト修道院にあるロマネスク風聖母子象に感動したので、作者を探していたが、偶然知人のシスターが西独の住所を知っていて手紙を差し上げる事ができた。ついてはあの様なロマネスク風のマリア像を我々の新聖堂の為に造っていただきたい" との丁寧な依頼状であった。

私は画家として独立する前に、ミションスクールの教師を勤めながら、十数年間教会聖像彫刻と取り組んできた。しかし当時は一般的にカトリック教会では、フランスやイタリヤから送られてきた石膏でつくられたマリア像や、素焼きに着色した博多人形風サンスルピス美術「19世紀から現代までパリのサンスルピス教会の周辺で売られていた通俗的な聖像様式」が中心で、ロマネスクとアルカイックな仏像を折衷した様な私の聖像彫刻は、一部の人を除いて認められなかった。その様な状況もあって、かなり長い間聖堂制作から遠のいていたのでこの注文に逡巡するものがあった。反面かつての作品に対する評価が、やっといただけたという喜びが湧いてきて再び聖像のためにノミをふるいたい衝動が起ってきた。その長い間私は彫刻を完全に止めていたわけではなく、大作では友人の和尚の為甲府観音を彫り、自からの為に小像をぼつぼつ彫る程度で、やはり制作の主力は平面絵画に集中された10年余であった。というのは彫刻作品は作ってしまえば、制作期間の長さもさることながら、その重量と制作経費は旅行勝ちな私にとって重荷であったことも制作を積極的に進めていけない理由であった。やはり木彫を始めてみると仲々乗ってこない、彫るリズムに乗るために約一か月、粘土原形制作、木取りと、繰り返しながら集中していくうちにやっと聖像が中から現れてくるのがみえはじめた。映像は外に求めている間は満足のいく形像にならず、内に深く潜心した時に自然に湧出してくることもわかってきた。芸術表現に於いては何よりも先ず自らの制作衝動が重要になる。しかし今回は建築との調和と協力のなかでの制作でなければならず、位置もポーズも学園側及び設計者からの条件付けがなされていた。そのなかで聖堂の完成図を頭に描きながら最高の姿を念じ続けた。現代芸術が陥りがちな独善的な表現手段を極力さけ、心を通わせるものでなければならない。ここでは、まず恵まれない子供たちの施設であり、その子供たちの為に豊潤な芸術美の力によって毎日の生活の中で無意識裡に聖なる愛が浸透するような聖像をつくらねばならないと念じた。分かりやすく、しかも香気に充ちていなければならない。そういった私の念願がつのればつのるほど、制作は困難を極めた。それは我意との戦いであり、自己に死に切る為の十字架の道行ともなった。今回の注文主及び設計者は、芸術に対する造脂の深い理解ある態度を常に貫かれたと思う。なによりも彫刻家に対する信頼と、祈りつつ待つといった寛容な姿勢に、作者も極力応えていかねばと祈りに近い制作態度に終始出来た。今その制作の日を振り返ると、個を越えた力、目に見えない意志、集合無意識に動かされて働いてきたとしか思われない。そこでは、内的にも外的にも完成にむかっての不思議な協和音が、いつも鳴り響いていた。それは、個のアトリエ制作では体験出来ない祝福された時間であった。

西欧近代の造型芸術がたどらねばならなかった個性と独自性の尊重の余り、分離と孤立、自己顕示性による疎外の不運は、今、芸術の社会参加という課題の中で、新しい協同体の創造、調和と協力という未来を垣間見せてくれた。



日本とドイツの間を何10回と往き来した手紙と電話、送られて来る習作の写真は、我々の描いていた御像そのもの、遠く離れていてこれ程心が通じることがあるのかと驚いてしまいました。ぼだい樹の材質も薄くかけられた色彩も、何より御像の暖たかなほほえみも建築とぴったり合って不思議なことでした。

（関口幹子）

クラフトマンシップの
金属工芸
キクカワ
菊川工業株式会社
TEL 03-634-3231 FAX 03-634-3237

イワタルリ

はじめに坂倉建築研究所の藤木隆男さんからトップライトについての問い合わせをいただきました。サレジオ学園の関口幹子さんが以前から岩田工芸ガラスを知っておられたことで連絡をいただいたのだと思います。ちょうど私が数年前から鋳込み方法によるガラスの作品に取り組んでいたことと、カトリックの教会建築ということで大変関心を持ちました。子供の頃、14年間カトリック系の学校に通っていましたので、教会にはなじみが深く私なりの思いがあったからです。信者ではありませんが私にとって教会はいつも心洗われる場でした。その後現地で藤木さんと関口さんのお話をうかがい、それまでに完成していた建築物を見せていただくうちに、私の今までの作品の延長線上で自然に制作できると感じました。是非制作させていただきたいと思い提案し、何回か話し合いを重ねて制作させていただくことになりました。建築物と直接取り合わせた仕事は初めてでしたので、特に藤木さんには大変ご助言をいただき、細かいところまで相談にのっていただきました。トップライトはコンクリートとの組み合わせですが、私のそれまでの作品にはそういった組み合わせのものが数点あり、すぐイメージすることができました。

製作を致しております。

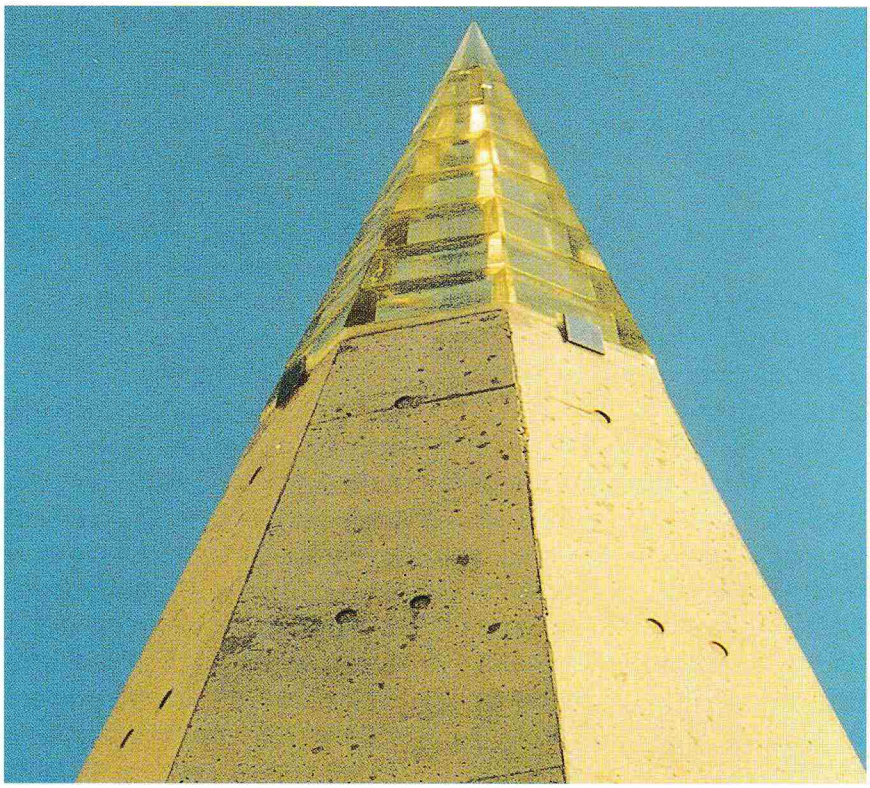
モニュメント　美術彫刻
時計塔　オブジェ
サイン　壁面レリーフ
フェンス　建築装飾一般
環境施設一般

黒谷美術株式会社

本社 〒934 富山県新湊市奈呉の江10-7
TEL 0766－84－8111 建築美術担当

マリア聖堂のトップをクレーン車で吊り上げた時のこと。"わぁきれい"と目を輝かせていたルリさんの人柄に感動したことが忘れられません。童女のような純粋さがあればこそだならぬ清澄なガラス造形が出来るのかと確信したものでした。

（関口幹子）

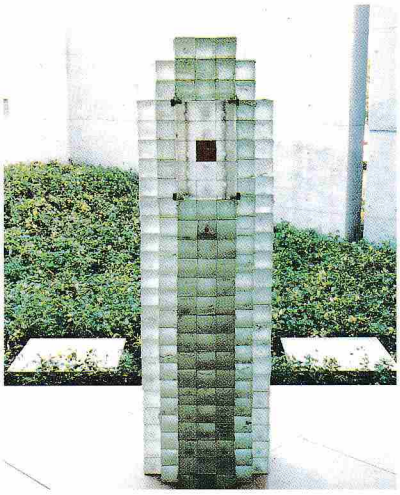


マリア聖堂トップライト

技術的には、ガラスは形体によって徐冷の時のひずみのとれ方等がすべて違うので、実験や試作を重ねながらの制作でした。それと並行してガラスで御聖櫃もできないかという相談を受けました。御聖櫃は神様のおられるところで教会の中でも大変重要なものなので、そのお話をうかがった時にはとても緊張感を覚えました。初めはガラスと金属の組み合わせでということでしたが、話を積み重ねるうちにすべてガラスでということになりました。これは私にとっては、よりイメージに近いことでしたので大変うれしく思いました。素朴で美しい光りを透過する存在感のあるものを考えました。自然な砂肌を持つガラスを積みあげていくことで、人の手による仕事が感じられる立体を想定しました。それについても藤木さん、関口さん、坂本さんにたくさんの励ましや助言をいただきました。

今回は、それまでの私の作品から制作意図を汲みとっていただいた上で、いいかたちでの話し合いを積み重ねることができました。このように自然な制作ができましたのは、藤木さんをはじめ皆様にいつも私の持つものをひきだすようにしていただいたからだと思います。

個性豊かで誠実な仕事がそれぞれの立場でひとつの環境を築き上げていく現場に接し、私のこれからの制作活動にとって大変貴重な経験になりました。このような機会をくださったすべての方々に心から感謝しております。



聖櫃

林　良子

昨年三月の半ばに突然の電話でドンボスコ記念聖堂の祭服の依頼を受けました。その前年の秋、日経新聞の文化欄に載った「日本の伝統ストラに織る」という祭服の仕事についての拙稿が機縁だった由です。

初めて訪れた東京サレジオ学園は既に第一期、第二期工事が完了していて、武蔵野の面影の色濃く残る広々とした敷地に点在する解放的な園舎の、やわらかな階調のオレンジ色の屋根瓦が印象的でした。自然素材のシムプルな建物の内には、手の温もりを大切にする感性が随所に見られました。それはかつて見たことのない美しい施設のたたずまいでした。

聖堂は子供の為の聖堂であり、光と風と緑が取り込まれること、そしていくらかイタリー的なイメージも加味されること等の説明を伺いました。四月に沖縄の先島に行く予定をお話しすると、祭服のために芭蕉布を見て来て欲しいと云われたのも驚きでした。

子供の侍者服は初めての仕事でしたが、此の旅先でのヒントもありました。芭蕉布は、九月の献堂式迄には間に合う量もなく、また後々の手入れの方法からも、管理の面で祭服には向かないことを知りました。

話し合いの進む中に、聖堂のモノトーンに近い空間の中に、祭壇の両脇に年間を通じて眺められる緑と、椅子の脚部の鋳物にふかせる緑青（ろくしょう）のやわらかいエメラルドグリーンがアクセントカラーとして浮かんで来ました。学園の聖堂として、祭服は常時可成りの数で使われることになります。祭服は典礼に仕えるもので主役にならない様にという立場もあります。明るく、温かく、自然に、シムプルにまとめようと思いました。主祭服と中心のストラは、年間の主日を通して用いる事の出来る黄金色に通じる黄色とし、そこに光と緑のイメージを添えることが出来ればと思いました。

主祭服1、脇祭服2、アルバ型祭服10、侍者服（子供用）16、主ストラ3、ストラ20、祭壇布1、の制作に許された期間は約四ヶ月、時には糸から作り、天然染料で染め、手で織上げるといった日頃の制作過程ではとても間に合わない仕事でした。アルバと侍者服の為には幸いイタリー製の麻地との出合いもありました。脇祭服には韓国の安東布（あんどんふ）を用いました。たまたま来日していたデンマークの知人の助力で、二十本のストラのためにフィンランドの織糸も敏速に入手出来ました。祭壇布には、ぜんまい綿を入れて紡いだ絹糸を持合わせて居ました。素材については幸運でした。祭壇布について云えば、祭壇の制作者、坂本さんの御希望で、三角形の単位の発展ということで、もじり織を専門とする畑中さんに織をお願いしました。その他、日頃自宅で主宰している「羊鈴舎」の手仕事仲間の協力を得て始めて可能な短期間の仕事でした。

ドンボスコ記念堂献堂式（1988.11.26）

廿数年前、スイスの仕事場に居た時、各地で新らしい教会を見ました。当時総人口三百万のスイスの教会は、それ以前に居たドイツの教会に較べて規模もずっと小さく親しみ深く思いました。私の師であったフランシスコ会のSr.フリューラーのお話によると、「1920～30年代、スイスでは若い建築、彫刻、ステンドグラス、モザイコ等の専門家達が集まって、教会を作る動きが起り、その時祭服を誰にやらせるかということで、当時スタンスという寒村の囲いのある修道院の学校で裁縫を教えながら、時々ユニークな発表をしていたそのシスターのところに話が来た」という事でした。その様な形でスイスの教会が建てられて行ったという話を興味深く聞きました。

帰国して祭服の仕事を始めた頃、教会建築と関連して仕事をしたいと思って居た事を、最近ふと想い出しました。実際にはその様な事は皆無だった為、当初の想いもすっかり忘れ去っていたのですが、はからずも此度の仕事は、私にとってもかつての夢の実現でありました。

子供用侍者服（麻）

狩衣風祭服（韓国安東布）

坂倉事務所スタッフの方達と、坂本さんと一緒に林さんのアトリエを訪ねた時のこと。いとおしむように染めあげた糸を大切にかかえて見せてくれました。この人ならとその時、心打たれたものでした。1段1段織り重ねていく気の遠くなるような長い時を、妥協をせずに最良の時をつむいでいかれるさまは、崇高ささえ感じさせます。山奥の数少ない植物をさがし出し、生きているその日の内に煮つめ色染めして出来た紫のストラの美くしさは言葉に云い尽くせないものでした。又、内陣の緑や光が透けて見えるようにと注文した祭壇布は1本1本手よりのレースでした。

（関口幹子）

日本建築美術工芸協会の成り立ち

（人名敬称略）

■契機：昭和43年(1968)6月6～12日の7日間、有志によって〈建築＋美術〉作品写真展―東京都中央区晴海の(財)日本建築センター展示館―を行ったところ、建築家と美術家の交流を続けては、といった希望があって佐藤武夫（早稲田大学教授、佐藤武夫設計事務所所長）その他が肝いり役になって任意団体を設立することになりました。

■建築美術工学協会の設立：昭和44年(1969)2月18日に設立総会を行い、理事長に矢橋六郎（東京芸大講師、矢橋大理石株式会社社長）季刊誌 a.a.i.a 創刊号が1969年8月1日に発行され、その後11号まで刊行されております。

■昭和46年（1971）より「文化のための1%システム法制定」についての調査研究と制定運動を始め、国・地方自治体その他の理解と賛成を得ることに努力しました。しかし、法制定までには至りませんでした。

■a、a、i、a 展覧会、a、a、i、a 見学会、a、a、i、a コーヒータイム、a、a、i、a 講演会及びa、a、i、a 環境芸術作品写真展など開催してきました。

■建築美術工業協会（任意団体）歴代理事長

昭和44年2月～48年6月　矢橋六郎
昭和48年6月～54年7月　岩井清太郎
昭和54年7月～57年6月　犬飼幸男
昭和57年6月～63年4月　遠山景行

また、会長制を昭和54年7月より施行

昭和54年7月～59年9月　佐藤次夫
昭和59年9月～63年4月　芦原義信
（副会長　内井昭蔵）

なお、昭和59年9月より名誉会長（佐藤次夫）を設ける。

■社団法人　日本建築美術工芸協会の設立

昭和63年4月21日に行い、従来の建築美術工業協会を改組して設立いたしました。そして昭和63年11月28日に文化庁所管の社団法人としての設立許可を得ました。

躰をソフトに護る
柔構造のアメニティづくり

TOYO

複合柔構造ボナート　ソフラナード
弾性舗装用ブロック　ソフラン DN-ブロック
最適柔軟度の弾性舗装材　ソフラン ジョイナーAF-J

東洋ゴム工業株式会社
化工品事業本部・環境システム営業本部
東京本社　〒151 東京都渋谷区千駄谷4-24-15　TEL 03-404-1251
大阪本社　〒550 大阪市西区江戸堀1-17-18　TEL 06-441-8801

社団法人 日本建築美術工芸協会 平成元年度役員

▶会　長　芦原義信
▶副会長　嘉門安雄
▶副会長　岡部　正
▶専務理事　河野通祐
▶理　事　朝倉　摂
飯野毅一
池田武邦
岩尾　弘
内井昭蔵
宇津野和俊
近江　栄
絹谷幸二
大同　元
遠山景行
中島昌信
薬袋公明
向井良吉
柳澤孝彦
矢橋信雄
▶監　事　佐々木群
西山泰三

インフォメーション――1989京都シンポジウム

日時：平成元年11月25日（土）　午後1時半より午後5時

場所：京都市国際交流会館イベントホール
（〒606 京都市左京区粟田口鳥居町2-1 ☎075-752-3010）

交通機関：市バス5、特5、27、46系統「京都会館美術館前」東600米、市バス東6、東9系統、京阪京津線、京阪バス「蹴上」北300米

内容とスケジュール

総合司会　木下　猛（川島文化事業団）

開催に当たって挨拶
（社）日本建築美術工芸協会副会長
岡部　正

1．記念講演　午後2時～午後3時
「これからの我が国の文化政策の推進」
文化庁長官　植木　浩

2．シンポジウム
「都市文化と建築美術について」
午後3時～午後5時
司　会　内井昭蔵
パネラー予定（五十音順）
朝倉　摂　芦原義信
梅原　猛

入場無料、但し先着300名まで。

芦原　義信
Yoshinobu Ashiwara
建築家、日本芸術院会員
芦原建築設計研究所
東京都渋谷区桜丘町31-15
TEL. 03-463-7461

村松貞次郎
Teiziro Muramatsu
法政大学教授、東京大学名誉教授

阪田　誠造
Seizo Sakata
建築家
㈱坂倉建築研究所
東京都港区赤坂9-5-12
TEL 03-403-3551

関口　幹子
Motoko Sekiguchi
社会福祉法人　東京サレジオ学園法人本部
東京都小平市上水南町4-7-1
TEL 0425-21-0412

藤木　隆男
Takao Fujiki
建築家
㈱坂倉建築研究所
東京都港区赤坂9-5-12
TEL 03-403-3551

坂本　和正
Kazumasa Sakamoto
デザイナー
方圓館
東京都世田谷区松原3-18-11
TEL 03-322-1217

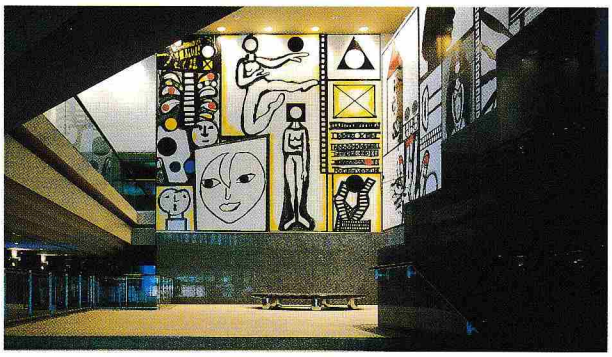
横尾　龍彦
Tatsuhiko Yokoo
画家・聖像彫刻家
Niedrkol lenbach 1 5067 Kürten
West Germany

イワタルリ
Ruri Iwata
ガラス造形家
㈱銀鮭　東京都新宿区弁天町9
新陽ビル　TEL 03-5273-3270
岩田工芸硝子㈱　東京都葛飾区
堀切4-65-4　TEL 03-604-3121

林　良子
Yoshiko Hayashi
染織家
東京都世田谷区代田2-27-11
TEL 03-414-5074

（執筆掲載順・敬称略）

主催　社団法人　日本建築美術工芸協会
後援　文化庁／京都府／京都市／NHK京都放送局／朝日新聞社／日本建築学会／新日本建築家協会／日本美術家連盟



21世紀に贈るメッセージ（香川県民ホール陶壁画6,463×28,632mm）　大塚オーミ陶業ニュースより

社団法人 日本建築美術工芸協会の事務所移転

来る11月12日(日)より、次の場所へ移転します。よろしくお引き立て下さるようお願い申し上げます。電話番号はまだ決まっていません。

〒108 東京都港区芝5丁目26番20号
建築会館　6階

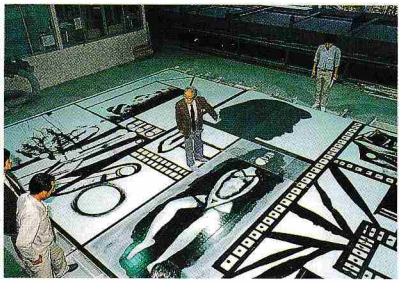
21世紀に贈るメッセージ

名誉会員　猪熊弦一郎

我々が生きてきた20世紀とは、どんな時代であったのか―。文明の進歩と引き換えに起こった自然破壊など、通って来た道はイバラの道ではあったけれど、文化一般についていえば、20世紀にはさまざまな基礎づくりがなされたといえよう。そして、それらが今、21世紀に向かって、花開かんとしている。

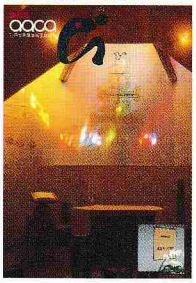
その一つにバレエがある。一昔前までは、日本はどちらかといえば遅れている国だったのに。今では森下洋子さんをはじめ、大勢のプリマたちが世界の檜舞台で大活躍している。まさに、20世紀を象徴するできごとではないだろうか。

自分が生きた時代に起きた事柄を、写実と抽象を織り交ぜ、陶板で表現してみたいと思った。円は太陽、直線は道路や交通、三角はポストモダン。若人がいる、動物がいる、鳥がいる…。高温で焼かれた陶板は、何百年の歳月を経てもなお、色鮮やかにそして雄弁に、20世紀人からのメッセージを後世に伝えてくれることであろう。



未だ解決をみない、さまざまな問題をかかえているものの、我々は、概ね幸福な20世紀の終末を迎えようとしているのではないだろうか。思いを残すということは、未知数がたくさん残っているということである。未知数を持っているということは、人間にとって幸福の絶頂なのである。

■写真の説明



表紙　小聖堂：祭壇　十字架はステンドグラス製　窓からの光と陽光が池水に反射した光とがステンドグラスを経てゆらゆらと投影される。光と波のページェントを見せる。
（撮影　新建築社　小川泰祐）

表2　ドンボスコ記念聖堂：十字架　祭壇　聖櫃　洗礼盤　聖水盤　バンコを見る。
（撮影　新建築社　松岡満男）

表4下　児童園舎からの風景：左よりドンボスコ記念聖堂　地域交流ホーム（ナザレの舎）。
（撮影　新建築社　松岡満男）

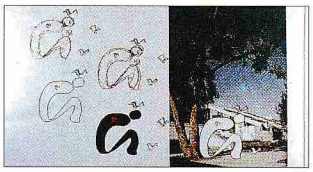
■編集後記

創刊号は、サレジオ学園の建築とその関連美術にスポットをあてました。宗教家の施主と、依頼をうけた建築家を始め多くの芸術家や職人たちの連帯によって、精神性の高い空間を、武蔵野のおもかげを色濃くのこしている環境のなかに創り上げています。阪田さんの御案内で、現地を訪ずれた我々編集に携わる広報委員も大変感激いたしました。見学のあと休憩におとずれた寮で、冷たい麦茶を頂きながら、寮の少年が歓迎に弾いてくれたピアノの素朴な音色が、とても印象的でした。（広報委員会　土屋　巌）

■表紙広告の説明

大塚オーミ陶業は、
〝芸術文化の創造・環境文化の創造・生活文化の創造〟をモットーに、セラミックの創造性を一段と進歩・充実させてゆきます。
事業内容：美術陶板・写真陶板・建築陶板・サイン陶板・テラコッタ
大塚オーミ陶業株式会社
〒101東京都千代田区神田司町2-9
TEL.03-294-1388

■シンボルマークについて



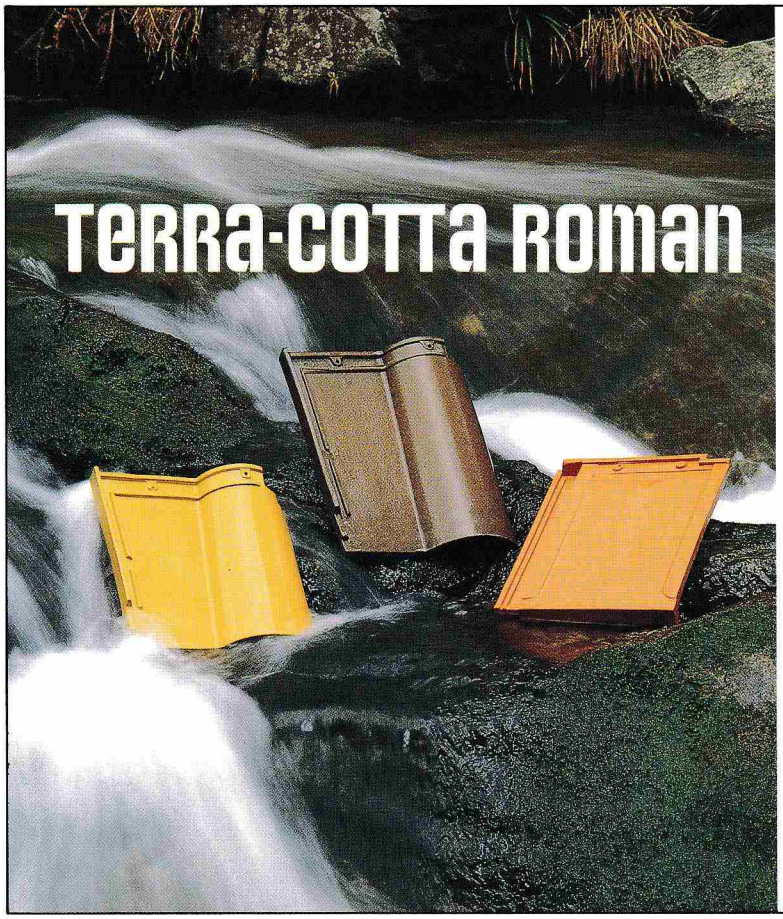
Aには以下の意味が込められている。

A	初め
AMENITY	心地よさ
ARCHITECT	建築家
ARTIST	芸術家
ARTISAN	職人
ASSET	遺産
ASSOCIATE	仲間

マークは、このAを“人が草の上に座り込んで、鳥の声に耳を傾けている形”に表したものである。心地よい空間、心地よい環境を創るという意味を強調している。

建築や美術や工芸の具体的な形とはかけ離れているが、心地よさを考えた場合、小春日和の日溜りの中で、あるいは、初夏の薫風の中で、日差しの暖かさ、風の爽やかさを肌で感じ、水面に躍る光のきらめき、緑の鮮やかさを眺め、鳥の声、樹々のざわめきに耳を澄ませ、枯草の匂い、野の花の香りをたのしむこと以上の“心地よさ”がこの世にいったい存在するであろうか。
（日本電子専門学校コンピュータ・グラフィックス科空間デザインコース講師・坂上みつ子）

発行：社団法人 日本建築美術工芸協会
Phone　03-270-0649
Fax　03-270-2633
〒100　東京都千代田区大手町2-6-2
日本ビル526-2号
振替：東京 1-365085
編集：(社)日本建築美術工芸協会広報委員会
宇津野和俊(委員長)、大多了介、小玉　功
坂上みつ子、高部多恵子、玉見　満
土屋　巌、山本　晃



ハイテクからポストモダンまで
いかなる設計コンセプトにも
応える高級瓦の主流品。

テラコッタローマン

FF50

SS50

オールフラット・タイプとハーフフラット・タイプの2種類があり、
応用範囲をより広げます。テラコッタローマンはまで表面色の
無釉瓦。色は自然環境にもマッチするアースカラーでラインナップ。

丸栄陶業株式会社
〒447 愛知県碧南市白沢町1-38
TEL(0566)48-1511(代) FAX(0566)48-1694